

ソルガム糸黒穂病に対する罹病程度の品種間差と種子消毒の効果

鶴岡克彦・我有満<sup>1)</sup>・高井智之<sup>1)</sup>・後藤和美<sup>2)</sup>・桂真昭<sup>1)</sup>・松岡秀道<sup>1)</sup>  
 (大分農林水産研畜産・<sup>1)</sup>九州沖縄農研・<sup>2)</sup>長野畜試)

【目的】

県内で、ソルガム糸黒穂病が発生が確認された。ソルガム糸黒穂病の明確な確認は本邦初であり、土壌伝染性の病気であることから、今後の発生拡大が懸念される。

そこで、市販品種および育成中の品種を用いて、糸黒穂病に対する抵抗性の品種間差を明らかにするとともに、種子消毒剤の糸黒穂病に対する効果を検討した。

【材料及び方法】

2005年に、県内の糸黒穂病汚染圃場において市販および育成中の66品種・系統を供試し、罹病の無かった23品種・系統のうち、15品種・系統について2007年まで検定を行い、罹病率を算出した。

種子消毒剤の検討は2007年に行い、供試品種として葉月、秋立を用いた。薬剤は、フルトラニル25% (種子重量の1%)、メプロニル75% (種子重量の0.4%)、チウラム80% (種子重量の1%)、キャプタン80% (種子重量の0.4%) をビニール袋内で種子に粉衣した。

【結果及び考察】

2005年に罹病しなかった15品種・系統は2007年までの3年間罹病しなかった。圃場での自然発病

による検定であるが、50%以上の高い割合で罹病する品種もあり、罹病しなかった品種については、抵抗性品種であると考えられる。

担子系菌に効果がある薬剤による種子消毒については、いずれの薬剤でも有意な罹病率の減少は認められなかった。

一般に市販品種は種子消毒剤で処理されて販売されており、キャプタン剤、又はチウラム剤で処理されているものがほとんどである。いずれの薬剤による種子消毒でも糸黒穂病に対する効果が認められなかったことから、種子消毒された種子を用いた検定においても、糸黒穂病に対する抵抗性の品種間差があると考えられる。

表2 糸黒穂病に対する種子消毒剤の効果

	罹病率(%)		
	葉月		秋立
	1番草	2番草	1番草
無処理	39.7	60.8	19.2
フルトラニル25%	44.3	48.5	27.6
メプロニル75%	39.4	55.5	15.9
チウラム80%	34.6	53.9	23.8
キャプタン80%	29.8	52.2	28.1

(注) 同列異符号間に有意差無し

表1 糸黒穂病の罹病率の品種間差

品 種 名	H17 罹病率(%)		H19 罹病率(%)	
	1番草	2番草	1番草	2番草
	葉 月	50.1 a	29.2 a	39.7 a
秋 立	48.1 a	20.6	19.2 bc	36.7 ab
KCS105	45 a	24.3 a	22.6 ab	23.5 bc
SSR4	2.5 b	0 b	1.1 c	0 c
TS314			6.7 bc	0 c
FS501(高糖分ソルゴー)	0 b	0 b	0 c	0 c

(注) 同列異符号間に有意差有り (p < 0.05)